

健やかに暮らせる地域づくりを！

山口県下関市で医療法人松永会と社会福祉法人松美会を率いる松永清美理事長は、地域の皆さんの健康を守るために44年間走り続けています。王子ネピア社長の清水紀晴が訪ねました。

清水 松永理事長は医師・心理療法士であり、警察検案医も続けられて69歳のときに叙勲を受けています。一代で医療法人と社会福祉法人を立ち上げた事業家でもありません。驚いたことに、その傍ら作詞もされると聞きました。

松永 はい。「ああ厳流島」をはじめ、私が作詞した歌が通信カラオケに40曲以上収録されています。歌手でもあるんですよ。本も文芸社から3冊出版しています。

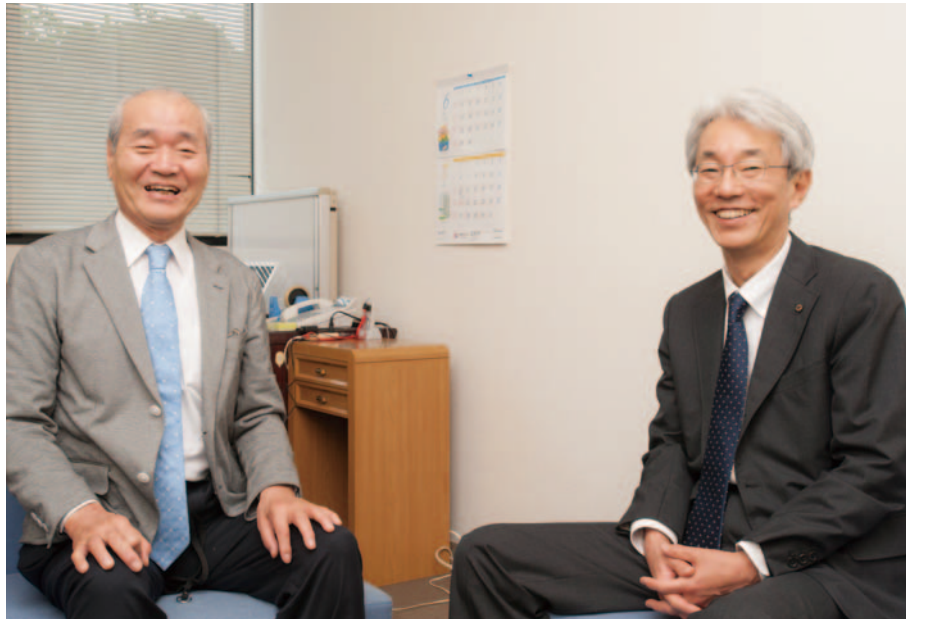
清水 多才でいらっしゃるんですね。始まりは、松永医院の開業だったのですか？

松永 そうです。1971年、32歳のときに松永医院を開業しました。多額の借金をしたので、救急も引き受け、昼夜を問わず休日も取らずに働き続けたんです。

清水 理事長のご専門は何だったのですか？

松永 外科です。1日200人以上の患者を診ていました。そんな生活も3年続けると疲れ果て、田舎に家を用意し、そこから通ったことがありません。自然から活力を得ると、にこやかに患者さんに向き合えるんです。

清水 そのお話は理事長が内視鏡法を始めたこと



と関係がありますか？

松永 いい質問です(笑)。疲れた私が「人間とは何か」「いかに生きるべきか」を考え始め、心理療法士になったのですが、カウンセリングでは救えない人がいることを知りました。そこで、自己の内面を観察して悩みを解決する内視鏡法を学び、メンタルヘルス研修所を立ち上げたのです。

社会福祉法人初のISOを取得
清水 すごくいいですね。深く追究されています。

松永 松永医院のほうは今現在、次男が院長を引き継ぎ、名称をまつなが医院に変更し、内科、消化器科、糖尿病内科、リハビリテーション科を院長が、心療内科、精神科、外科が私が担当しています。在宅療養支援診療所

も継続されている点も素晴らしいです。ホームページには、ご利用者や家族へのアンケート結果や評価が施設のコメント付きで公開されています。広報誌からもご利用者への思いが伝わってきます。

松永 長女の夫である辻中事務局長をはじめ職員全員で熱心に取り組んでくれています。サービスの質を高め、皆さんに喜んでいただけるのが一番です。下関市彦島地域包括支援センターを市から受託し、地域包括ケアシステムの中核を担っています。

地域と職員のための事業を継続する

清水 アイユウの苑はほかに2施設展開し、現在は特養と有料老人ホームの複合施設も完成され、現在は保育園を移転建て替え中だとか。

松永 職員の子もただでなく、地域の人の助けになればと思っっています。医療法人では作業療法士の長男が施設長として老人保健施設アイユウを、工夫しながら運営しています。

清水 病院や施設の主な食事は、集中調理施設であるセントラルキッチンを建設し提供されているそうですね。

松永 食事は生きるために大切です。次女が代表となり、有限会社アミタを設立し、「食で笑顔」をモットーに、様々な試みを行っています。施設で皆さんと一緒に食べて、ご

利用者様から感想を聞き、改善を重ねるなど、熱心ですよ。昨年7月からは一般向けに仕出し弁当「オードブル、刺し身盛り合わせ、ふく刺しの注文を受けています。



王子ネピア株式会社代表取締役社長 清水 紀晴

「松永医院が開業された1971年は、当社設立の年です。サービスの品質を高める姿勢も、ナンバーワンをめざすネピア品質へのこだわりと共通するものがあり、感銘を受けました。今後も皆さまに喜んでご利用いただけるよう努力します」

松永 人間はただ働くだけでは疲弊します。例えば5年後には、こんな事業をしたいと目標を持つと、意欲的になるし、落ち込みません。

清水 今日は勉強になりました。最後に今後の展望を聞かせてください。

松永 地域の皆さんと職員のために、事業を継続するのが第一。そして一生懸命働いてくれている職員の給与を上げたいです。そのために、私はまだまだ働きます。

利用者様から感想を聞き、改善を重ねるなど、熱心ですよ。昨年7月からは一般向けに仕出し弁当「オードブル、刺し身盛り合わせ、ふく刺しの注文を受けています。

テnderサポート通信 vol.3 special

おむつの勉強会で排泄ケア向上を実現

文/ジェイ・キャスト 中村尚子

王子ネピアでは、テnderサポートのカウンセラーが病院や施設を訪れ、排泄にまつわる相談を受けています。カウンセラーと連携し、排泄ケアの向上に取り組む神奈川県横浜市の山本記念病院を取材しました。

王子ネピアの金子裕子カウンセラーは、2年前、一般病棟と介護病棟、計131床を有する山本記念病院の國分梨沙介護長から排泄ケアの相談を受けました。

「紙おむつに1000mlのパッドを重ね使用しているため、患者様の排泄環境が良くない。ケアする人の意識を変え、排泄ケアの向上をめざしたいのです」

金子カウンセラーは早速、同病院でおむつの勉強会を開催。基本編では模型を使って、快適さを生む3原則①スポット吸収を意識する②立体ギャザーをしっかり立てる③クロス留めを中心に理解してもらいました。後日、数回にわたって現場立ち会いを実施。拘縮や円背の方、水様便の方などへ、実際にパッドの使い方を含めておむつを装着して見せました。

「モレの根本的な原因を理解していなかつ



山本記念病院の皆さん。前列中央が國分さん、同左端が柿崎さん、後列左端が窪庭さん

たと気づきました。モレを防止するためにパッドを重ねて使うという発想でした」と、主任の窪庭佐紀子さん。

モレもスキントラブルも激減

國分介護長は各病棟に排泄ケアのリーダー役となるおむつ担当を配置し、情報共有ノートを作って患者さんへの対応や気づきなどを書き込んでもらうようにしました。「各病棟スタッフの意識の変化がノートに表れています。アイデアや提案も目立つようになりました」と主任の柿崎淳子さん。カウンセラーも定期訪問の際にノートを確認し、必要なアドバイスをしています。



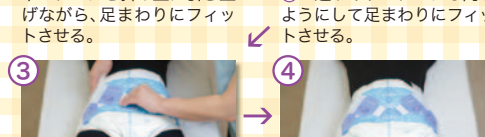
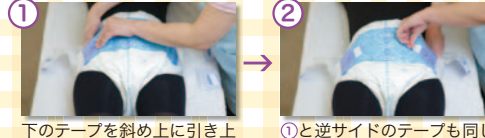
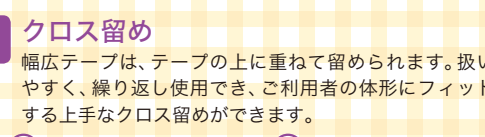
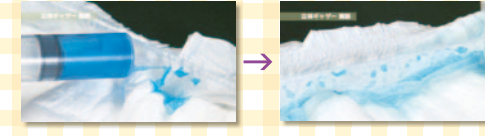
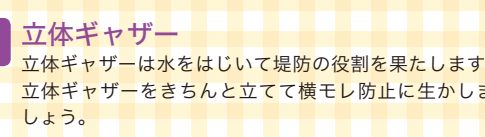
実践を学べる現場立ち会い

もう一つ工夫したのが各患者さんの尿量に合わせて、おむつとパッドを選び直し、尿モレ、皮膚トラブル、おむつ・パッドのずれなどの評価を実施したことです。そこから、パッドは400mlと800mlの2種類があれば十分だとわかり、コストも削減できました。3原則を徹底して守った結果、モレは減少し、スキントラブルは9割減に。新しいパッドの使い方の伝達や仕事の連携にも好影響が生まれています。國分介護長は、第22回日本慢性期医療学会で排泄ケア向上の取り組みを発表しました。

「排泄のプロになってもらいたい。それが勉強会の目的でした。患者様もおむつ担当も変わっていくので、今後もネピアさんの協力を得ながら勉強会を続けていきます」と國分介護長。「これからもみなさんと一緒に、考える排泄ケアへとスキルアップをめざしたい」と金子カウンセラーも意欲的です。

快適さを生む3原則

- 1 スポット吸収**
尿道口とパッドが密着していることによって、水分はパッドの奥深くまで浸透し、その吸収力をフルに生かされます。
- 2 立体ギャザー**
立体ギャザーは水をはじいて堤防の役割を果たします。立体ギャザーをきちんと立てて横モレ防止に生かしましょう。
- 3 クロス留め**
幅広テープは、テープの上に重ねて留められます。扱いやすく、繰り返し使用でき、ご利用者の体形にフィットする上手なクロス留めができます。



下のテープを斜め上に引き上げながら、足まわりにフィットさせる。①と逆サイドのテープも同じようにして足まわりにフィットさせる。③上のテープで腸骨を覆い下向きに留める。④すき間を作らないように確認する。